

アビスコ — ラップランドの山岳国立公園

Abisko — A Mountainous National Park in Lapland

札幌市 高橋英樹

アビスコへ For Abisko

アビスコ Abisko はスウェーデンの北、ラップランドの地にある (図1)。すでに北極圏にはいるものの夏には自然を愛するツーリスト、トレッカーがスウェーデン中から集まってくる。アビスコ国立公園はトルネツレスク Torneträsk 湖 (水面標高342m) の南にひろがる山岳・溪流・湖よりなる変化に富んだ地にあり、総面積は7700ha、1909年に設置された (図2)。年降水量は300mmをこえずスウェーデンでも降水量の少ない地域だが、石灰岩層があり地形的にも変化に富んでいるため豊富な植物相・植生がみられる。ここはスウェーデで最も知られている国立公園で、北海道で言えば大雪にでもあたるだろうか。実際私が滞在していた間にも休暇で遊びに来ていた日本人一家 (ストックホルムに留学しているとのことだったが) にも会った。7ヶ月スカンジナビアにいた間に高山植生としてはここと中部ノルウェーのコングスウォール (8号に辻井先生による紹介記事がある) を訪れたが、スウェーデン人研究者には「スカンジナビアの代表的な2つの高山植生を見たことになる」と後で言われた。

ウプサラとストックホルムのほぼ真ん中にあるアーランダ国際空港のすぐ隣に国内空港がある。午後0時30分に飛び立ったS A Sは2時10分にアビスコの東にあたる町

キールナに到着した。人口は3万にもみえない小さな町だが鉄鉱山の町として有名である。そもそもこの町の西方約100キロにあるアビスコが開かれたのもこの鉄鉱石をノルウェー側の不凍港ナルビクから積み出すためキールナ-ナルビク鉄道を敷設したことに始まる。列車の待ち合わせの間町の中をぶらついていると公園のやぶにコケモモやリンネソウがはえている。ここは確かに北極圏である。

キールナ駅を4時50分に出た列車はアビスコ・ツーリスト駅に6時30分到着した。駅のすぐそば、線路と並行に走っている道路を向こう側にわたったところにツーリストホテルがある。日本の観光地にみられるげばげばしさはなく清潔・機能的で居心地のよいホテルだった。温泉のないのは残念だが火山のないスカンジナビアでは望むべくもない。代わりにサウナがある。外を歩いて冷えきった体にはなりよりであった。7月下旬というのに我々が滞在した5日間、日中でも10度を越えることがなかった。本格的な真夜中の太陽を見るのには少し遅いのだが、事実上夜は暗くならず白夜の季節である。

ニューラ Njulla

国立公園区域の北西の境界を区切っているのがニューラ Njulla (1169m) と Sloahtta

(1191m)の2つの山だが、低いほうのニューラのほうが知られている。ニューラには中腹までリフトがあり簡単に高山植生にアプローチすることができる。リフトに乗って上がっていくと上から降りてくる人たちが「へい Hei」と声をかけてくる。これは英語のハイとかハローにあたるスウェーデン語である。日本でも山道ですれちがう時は「今日は」と呼びあう習慣があるがあれのスウェーデン版である。

リフトの終着駅から上にはヒメカンバ *Betula nana*、*Empetrum hermaphroditum*、*Salix herbacea*などのわい性低木がある。その他黄色の花としてはキバナノコマノツメ *Viola biflora*、*Pedicularis lapponica*、*Potentilla*、*Ranunculus*などが、ピンクの花としてはエゾノツガザクラ *Phyllodoce caerulea*、*Silene acaulis*などが、白花としてはムカゴトラノオ *Polygonum viviparum*、キョクチチョウノスケソウ *Dryas octopetala*、イワウメの母種 *Diapensia lapponica*、*Calluna tetragona*などがある。ニューラと Sloahitta の頂上を結ぶ稜線にはまだ雪が残っている。この雪渓を越え稜線の西側に出るととたんに植生は貧弱になる。ただし西側は公園区域外で採集自由。地面に這いつくばって採集に夢中になっていると何か気配を感じる。目を上げると20-30頭からなるトナカイの群れが私を遠巻きにしながら移動中であった。夏には低地で大発生する蚊を避けて高山で遊牧すると聞いていたが、それである。トナカイに囲まれながらの採集は始めてであったが、なぜか自分が自然の中に完全に

溶け込んでしまったような心地よい錯覚に陥った。

帰りは Rihtunjira の小溪谷沿いに Abiskojojk 川までおりた。リフトは片道40クローネで、往復は50クローネ。そのため多くの人はリフトでおりてしまう。下山路ではほとんど人に会わずゆっくりと気ままに歩くことができた。リフト終着駅を下った所のやや湿性のお花畑は特に素晴らしく欧州キンバイソウ *Trollius europaeus* (図3)、ミヤマキンポウゲ *Ranunculus acris*、キバナノコマノツメの黄色の花のじゅうたんであった。垂直分布的にみるとアビスコあたりでは一番下が欧州ダケカンバ *Betula pubescens* var. *tortuosa* の林で針葉樹はほとんどみることができない(中・北部スウェーデンの針葉樹林帯を構成する欧州トウビ *Picea abies* はここでは欠落しており、少数の欧州アカマツ *Pinus sylvestris* が残存的にみられるのみである)。その上がヤナギ属の低木林(これが日本のハイマツ帯にあたる感じか)、その上が高山帯というべきものでヒメカンバやツツジ科のわい性低木が出てき、さらにその上は地衣類が優占する所となる。

リフト終着駅がヤナギ林と高山帯との移行帯あたりにあたる。小溪谷沿いに下りていくと、私の高度計で540mあたりで欧州ダケカンバの林へと移行した。この比較的明るい林床・林縁にはエゾゴゼンタチバナ *Carnus suecica*、*Geranium sylvaticum*、*Melampyrum* などがみられる。

二種カンバ Two Betula Species

アビスコ一帯の低標高の林は主に欧州ダケカンバ *Betula pubescens* var. *tortuosa* からなっている。スウェーデン語で Fjällbjörk (= mountain birch) だから名前はまさに日本のダケカンバであるが、果穂は下向きになりシラカンバ節にはいる。アビスコにはもう一種わい性のヒメカンバ *Betula nana* が生育しており一般的にはより高い標高にみられる。特に風しょう地では地面にべったりはった高さ10cmほどのマット状となっている。この2種はその典型的なものを見ている限り間違いようもないのだが、同所的に存在しているような所で両者の雑種ができる。アビスコ東駅の近くにあるリサーチステーション (図4) のアンダーソン氏にその雑種株なるものをみせてもらった。みかけは欧州ダケカンバのものだが、葉の形がよりまるっこくヒメカンバに少し似た感じがある。ノルウェーのコングスウォールでもいわゆる雑種といわれている一連の個体を見せてもらったが、そこでも丈・枝ぶりは欧州ダケカンバに似、葉が幾分ヒメカンバにも似ているかなというものだった。

私の印象は欧州ダケカンバそのものがかなり大きい変異をもった種で、いわゆるヒメカンバとの雑種といわれているものは欧州ダケカンバそのものの極端な形ではないか、というものだったがこの疑問はまだはっきりと解消されていない。

アークティック・ロドデンドロン

Arctic Rhododendron

英語でアークティック・ロドデンドロン

と呼ばれるのは *Rhododendron lapponicum* で、スウェーデンでも限られた所にしか生育せず稀少植物のひとつとされている。アビスコでは Abiskojokk 川の溪谷沿いや Njulla 山で比較的簡単に見られる (図5)。この植物が我々にも興味深いのには訳がある。日本では北海道根室の落石にしかみられないサカイツツジが最近の見解ではこの種の亜種 (*Rhododendron lapponicum* ssp. *parvifolium*) とみなされているのである。私と共にアビスコに来ていたウプサラ大学遺伝学教室のチールマン博士のねらいはこの植物で、彼は両者は別種との意見だった。日本産のサカイツツジとアビスコの *R. lapponicum* とを種子から育ててみると違う生育反応を示すとのことである。アビスコでは高さ20cm以下のわい性低木で北海道のサカイツツジとはかなり違う印象だが、花は確かに似ている。広義には周極要素のひとつということになり、種内分化の研究対象として興味深い種類である。

王の道とメシマリヤ

Royal Route and Mesimarja

アビスコを出発点として南西に伸びるハイカーのための道が王の道 (Kungsleden = Royal route) である。名前の由来は聞きそこねたが案内書によるとその歴史は19世紀末までさかのぼり、いくつかの道がネットワーク状につながり結局300kmさきの Hema-van まで行けるらしい。アビスコの南50kmのところにはスウェーデンの最高峰ケブネカイセ Kebnekaise (2117m) がありそこへの登山路ともつながっている。私にとっ

ては憧れの山だったが、はるかなる遠い山であった。キールナからアビスコに向かう列車の窓からわずかに見えた白い頂は確かにケブネカイセのある方向だった。日数の限られた旅では望むべくもないのだが王の道を気ままに歩くことは現代のスウェーデン人にとっては最高の贅沢ということになるのだろう。

私が7ヶ月住んでいた古都ウプサラの郊外にも植物分類学の大家リンネの名をとったリンネの小道 Linnestigen があった。夏休みには昔リンネが採集をしたというその道沿いで市民向けの自然観察会が開かれる。200年以上前にあのリンネが採集した場所と聞くとなぜか特別の場所と思えてくるから不思議でもある。

王の道はアビスコ・ツーリスト駅からニューラのリフト乗り場へ行く道の途中左手から始まる、それは木製の門であり日本の古いお寺の門構えといった風情である (図6)。私は最初の2-3 kmを歩いたのみだったが別行動をとったチールマン博士はもっとおくまで行き、極地キイチゴ *Rubus arcticus* の花の写真を撮ったといささか興奮した面持で話していた。この種は種小名が示すごとく北地に生息するキイチゴ属の一種でフィンランドでは低地にも比較的普通にあらわれるそうだがノルウェー・スウェーデンでは珍しい。このキイチゴのベリーからはメシマリヤという果実酒が作られフィンランドの名産のひとつである。甘いのでそう沢山飲めるというものではないが自生地をほうふつとさせる香りがある。フィンランド出身の博士にはことのほか思

い入れがあるようである。

エピローグ Epilogue

今から35年ほど前の昭和29年秋、北大の館脇操博士(北大植物園の園長も務められた)もここアビスコに足を踏み入れている。

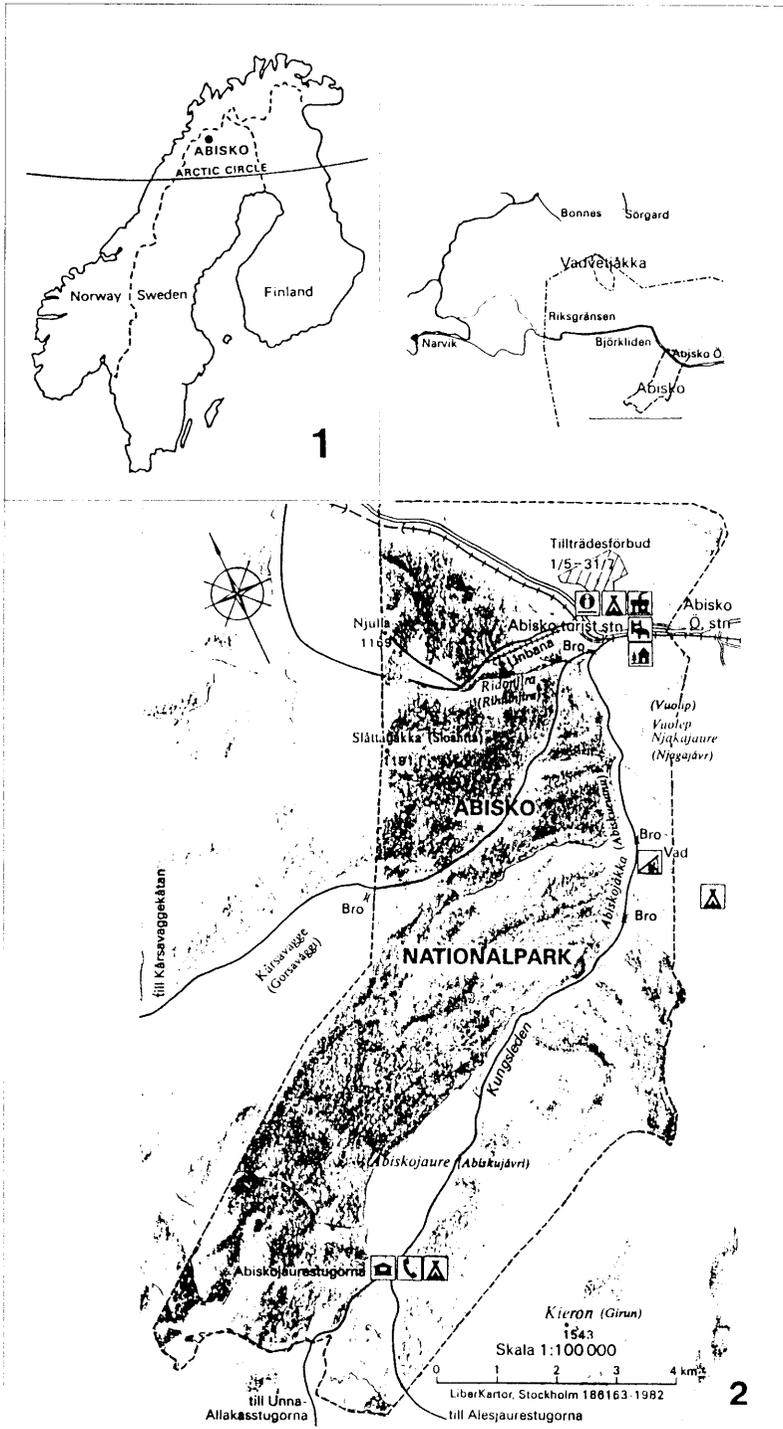
——私はときどきボンヤリとする自分に「おい、ラップランドを歩いているのだから」と心にいいきかせながら、黄葉した林から林を縫った。——

——極地圏の一夜。この辺りの山のスカイラインのような曲線の幻想曲に揺れながら、私もそれにふさわしい幻想をむさぼりつつけよう。——(館脇操「北方植物の旅」より)

参考文献

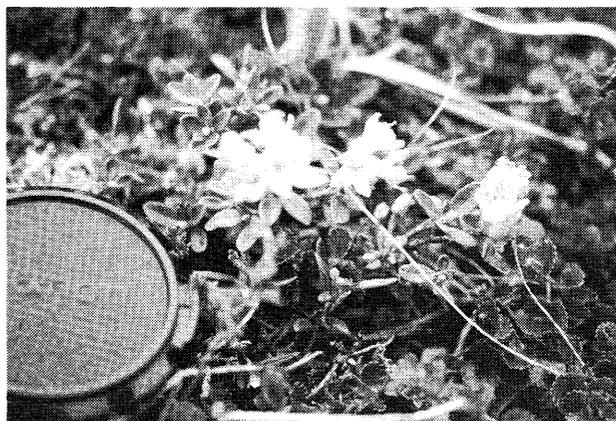
- Bingman, I 1984. National Parks in Sweden, Europe's last wilderness. 119pp. Nat. Env. Prot. Board, Solna. (スウェーデンの国立公園の解説書)
- Lewejohann, K. & H. Lorenzen. 1983. Annotated check-list of vascular plants in the Abisko-area of Lake Torneträsk, Sweden. Ber. Deutsch. Bot. Ges. 96: 591-634. (アビスコ地域の維管束植物のリスト)

大の
られ
いる。
分に
「だぜ」
から
スカ
なが
まり
の旅」

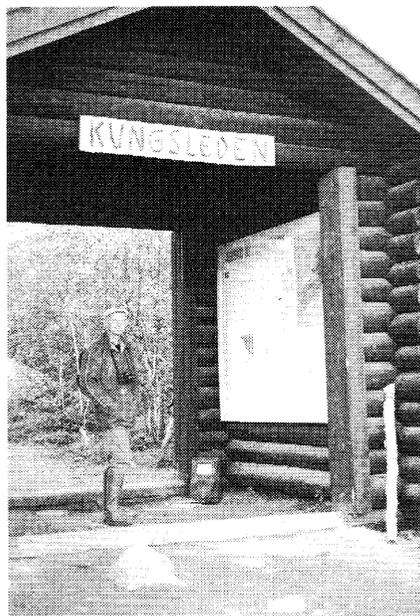




左 欧州キンバイソウの群落
 右 極地研究記念切手に描かれた、スウェーデン王立科学アカデミーのアビスコ・リサーチステーション



上 サカイツツジの母種アーティック・ロドデンドロン
 右 “王の道”の入り口。門の前に立つのは、ウプサラ大学のチールマン博士



交
 マー
 ヤナ
 ラン
 Sa
 Sa
 Sa
 Sa
 の5
 とい
 ンド
 を試
 岩
 極地
 生産
 の判
 件を
 Co
 Pe
 こ
 リス
 はF
 C
 附近
 74°4
 ラス
 47°